

カートリッジで「紙芝居」購入し国際交流

神奈川大学「本の架け橋プロジェクト」

神奈川大学(横浜市神奈川区)は、2013年2月にベルマーク運動の参加登録をしてから現在までに、紙芝居42点を購入し、日本語を学ぶ国内外の子どもたちに届けています。大学が進めている国際交流事業「本の架け橋プロジェクト」の一端を、ベルマーク預金で買った物品が担っています。活動をすすめる総務部地域連携推進室の市川洋行課長、保坂彰茂さん、河野直子さんに「リモート」でお話を聞きました。

集めているのは使用済みインク・トナーカートリッジのみ。回収箱は構内のフリースペースや生協購買部入り口など人通りの多い9ヵ所に置いてあり、河野さんが、週1～2回を目安に回収し、仕分け・集計します。注文書の記入は保坂さんが担当しています。

2009年、1万冊の本を届けることを目標に掲げてスタートした「本の架け橋プロジェクト」の一部として、この活動は位置づけられています。人間科学部人間科学科の松本安生教授らが、ブックオフコーポレーション(本社・神奈川県相模原市)などと協議を重ね、産学連携事業として立ち上げました。提供された中古書籍や、一般から寄付された書籍を集約し、国内外で日本語を勉強する子どもたちに届けています。寄贈先からは紙芝居のリクエストもありますが、中古ではなかなか手に入りづらいためベルマークを使って購入しているのだそうです。今年7月20日時点で寄贈数は1万3675冊と、目標を大きく



㊤左上から時計回りに保坂彰茂さん、河野直子さん、市川洋行さん ㊦㊧ベルマークで購入した紙芝居 ㊨㊩プータンで紙芝居の読み聞かせ

超え、さらに続けられています。

カートリッジの収集には、学内だけでなく地域などからの協力も寄せられています。2017年には、やはり産学連携協定を結んでいる湘南信用金庫(本社・神奈川県横須賀市)から寄贈を受けました。大学側も、毎年11月に開かれる「ホームカミングデー」のパンフレットで、卒業生に呼びかけたことがあります。

河野さんは以前、寄贈先が決まったタイミングで、学

内の回収箱に、協力へのお礼メッセージを貼り付けたことがあるそうです。「ただカートリッジを入れて終わりではなく、その先……紙芝居になって寄贈先につながっていることを皆さんに意識してもらえたら嬉しいです」。今後の具体的な数値目標は設けていませんが、市川課長は「寄贈先から喜びの声が届くことがあり、活動の重みを実感しています。プロジェクトは今後も続けていきたい」と話してくれました。



コロナ禍の休校中に21万点の「お宝」発見

長野・安曇野市立穂高北小

コロナ禍で休校中の4月、長野県安曇野市の市立穂高北小学校(小松幹校長、児童679人)の大島紀志世先生が、校内に置かれたままのダンボール3箱から、なんと21万点ものベルマークを見つけました。

北アルプスを間近に仰ぐ穂高北小は、1970年にベルマーク運動に参加し、累計470万点超のマークを集めてきました。現在は5、6年の児童の収集委員会が活動の中心で、収集の呼びかけや仕分け・集計作業を担当しています。

4月中旬、休校中なのを利用して先生方は普段片付けられないところの掃除をしていました。その際、職員の子更衣室の棚の上段に、ダンボール箱が3つあるのを大島先生が見つめました。中にはどれもたくさんのベルマークが。「宝の山が出てきたよ!」。すでに脱退した会社のマークもあり、大島先生は「おそら

く10年ぐらい誰にも気づかれずに置かれていたのではないかと推測します。

大島先生の着任は今年4月ですが、実は15年ほど前はお子さんが同校に通っていて、自らはPTAのベルマーク責任者をしていました。その経験から今回の箱は「20万点ぐらいありそう」と直感。先生方や児童の収集委員が手分けして仕分け・集計し、8月に大島先生がとりまとめたところ、予想にたがわず21万点を数えました。

整理を終えたベルマークは新学期、「なんと!! 20万点達成!!」という大島先生のメッセージとともに校内で展示されました。子どもたちからも「すごい!」という声が上がっていたそうです。

今回見つかったベルマークで貯めた預金は、各クラスで使うボール、USBやSDカードが使えるオーディオデッキの購入に役立つ予定です。ボールは昨年もベ



㊤穂高北小学校の大島紀志世先生 ㊦マークを仕分ける収集委員たち



ルマーク預金で買いましたが、個数が足りず、収集委員会が購入品として提案。先生たちも「今年は全クラスに配れるね」と喜んでいるそうです。

大島先生は「ベルマークは、捨てずに

貯めれば、自分たちで買える物があるだけでなく、買い物額の1割が支援に回ります。しまい込んだままになっているベルマークがないかどうか、他の学校も見直してみても」と話してくれました。

へき地学校からお礼のメッセージ

北海道・根室市立光洋中、東京・青ヶ島村立青ヶ島小

今年度、ベルマーク財団がへき地学校支援として備品を寄贈した北海道根室市立光洋中学校(藤原秋彦校長、221人)からメッセージが届きました。事務職員の川口尊久さんによると「タイマーは文字盤が大きく、教室の後ろの席からも読み取りやすいと、生徒からも好評」だそうです。他にも電子ホイッスルと角椅子を選びました。



同校はJR東根室駅から徒歩2分。日本最東端の駅です。学校生活もコロナ禍の影響を受け、マスク着用・消毒・換気の徹底や、行事の縮小制限などが行われています。一方、今夏は「GoToトラベルの効果もあったのか、遠方からの観光客が多かったように見えた」そうで、観光地としての人気の高さがうかがえます。

東京都青ヶ島村立青ヶ島小学校(木下和紀校長)からもメッセージが届きました。同校は書道セットや図工で使うローラーセット、ワイヤレスアンプを希望しました。下川耕史副校長は「本校は伊豆諸島の最南端にあり、交

通や物資の輸送が困難な地域です。このような贈り物は大変ありがたいです」と話してくれました。

東京から約360kmの位置にある青ヶ島村は人口163人。全国で最も小さな自治体です。村の唯一の学校、青ヶ島小中学校には小学生7人、中学生4人が通っています。島には高等学校がなく、中学校を卒業すると進学希望者は島外へ出ることになります。

